

六

花



4

2023

りっかはいくかい

乙女餅

山田 六甲

すみれ咲く頃やははだの乙女餅

宝塚の方

稲美野は妃生む地ぞ麦青む妃

オマーン王妃・景行天皇

桜咲く伊豫の一六タルトかな

松山土産

春の蜘蛛三行跳びに目覚めけり

書斎の蜘蛛君

一滴を日のしぼり出す春氷柱

犬ふぐり夜空を歩くごと歩く

精米機横に遊べる雀の子

石段の一段高し花の城

津山城

夜昼を違へて春の星の国

伯刺西爾より帰国

水ぬるむ川を曲げたる竹林

裏庭に子山羊すすくありにけり

犀川の音もつれぬし芝火かな

加賀の川二つ流れてぬるみけり

何捨てに青きを踏んでゐるのやら

ビューティフルサンデイ風の光かな

櫓のきしむたびにふくらみ来るさくら

松江城

啓蟄の日も知らで虫稿を這ふ

さげもんの天井低し雛祭

柳川「お花」

稲美野の果に枝垂るる桜かな

虚子の忌や育ての親は別の鳥 谷口一献

「虚子の忌日」は四月八日。その日は釈迦の生まれた日でもあり、仏生会。寺では花まつりが行われる。その日に生まれあわせた虚子は様々な俳人を育てた。母はちがっても、いや、母がちがうからこそ歴史的な実績を残した偉人は多い。そんなことをいろいろ連想、想像させられる作品。郭公の托卵にも通う。

(六甲)

出初式えつさおつさと梯子隊 廣畑育子

出初め式とは消防隊の新年の行事。式には新しい消防車や機械の新品をお披露目する意味もあるが掲句のように古式に乗った梯子のりなども行われる。梯子を運ぶ、屈強な若者の様子を火事の緊迫感を出さず松の内の行事らしく「えつさおつさ」とほほえましい言葉の幹旋で松の内気分が残る地方の出初式を詠んだ。

(六甲)

拾はれし過去はおぼろや炬燵猫

磯野青之里

炬燵でうとうとと居眠りしながら猫は「はて、いつ拾われてきたのだろうと考えている。飼い主もいつ拾ってきたのかも覚えていないほど家族同然に堂々とすごしている猫。猫も野良猫と家猫では寿命がだいぶん違う。我が家の家猫は二十年以上生きたが、野良猫は平均八年くらいという。我が家は雄の親猫が子猫を三匹連れて戻り、子猫を預けて安心したのか、すぐに亡くなった。母猫は不明。(六甲)

雪嶺抄

浮寝鳥 ◎ 笹村 政子

曾根天満宮

元朝や天満宮の松の空

大吉を目にまぶしめり初籤

青竹に染まる手水や寒に入る

枯蓮の鋭き影水を射ぬきけり

ひと風に転がりさうな浮寝鳥

一手づつ掴む雲梯初御空

揺るるたび影の重なる団子花

さりげなく娘の忌にも触れ初便

婚約を告げたる父の木の葉髪

寒林に今拒まれてゐる私

ひと風に転がりさうな浮寝鳥

ひとかぜにころがりそうなきねどり

浮寝鳥とは越冬のため渡ってきた鳥が川や湖沼などの水上でひと冬を過ごし、水に浮いたまま、気持ちよさそうに眠っている水鳥のことで、殊に鴨などをいう。丸まっているのは羽毛を膨らませて寒さを防ぐためで、その様子は風が吹いただけでくると転びそうだと聞いた。その丸まった姿が毬のように愛くるしく親しみが湧く、それは作者の慈愛の眼で見ている。「初御空」(はつみそら)の句、たしかに雲梯の手は片手でも離せば落ちるという常識を、敢えて言ったところに作者独自の目がある。団子花の句は政子の得意とする影を詠んで見事、初便の作品、さりげなくお嬢さんの忌にも触れてある初便に友の心遣いが嬉しいと詠んだ。寒林の作品は政子の心境が冬の林までもが私を拒んでいるように思えるよという微妙な心の変化を述べている。

初鴉 ◎ 志方 章子

無口なる男のやうな冬木立
 美しきものは淋しき星凍つる
 横顔の美しき子や琴始
 鏡餅でんと一人の暮しかな
 けふといふ日のためにあり冬帽子
 白障子誰やら過ぎてゆきにけり
 若菜摘む遠き父母想ひつつ
 読初や新書の匂ひただよへり
 双六を一緒にしたる兄在らず
 初鴉やつぱりあんたは阿呆やなあ

はまなす抄

初山河 ◎ 升田ヤス子

初写真モンサンミッシェル訪ひけりと
 太陽のフラッシュ鴨の浮かぶたび
 歴として夫と行く道初山河
 屠蘇祝ふ故山の土の盃に
 なよやかに神酒を注がれて初詣
 韋駄天や十日えびすの漢はも
 手土産をばらして分けて女正月
 指痕の餅花かかげ煤天井
 搦手の一筋道や草氷柱
 雛・行器ほかいその他飾りて蔵二階

無口なる男のやうな冬木立
 むくちななるおとこのやうなふゆこたち

譬えが独創的で面白い。無口な男は男らしく多言を弄さず一言で物事を締める場合もある。冬の枯れ木も飾りを省きたいっぽんどっこ（男の心意気）の凛々しい冬木。「やうな」という比喩を私は嫌うが、掲句の場合は独自性のある表現なのでよしとする。夢風撰候補。「初鴉」の句も佳い。「やつぱりあんたは」というフレーズが松山恵子の「だからいったじゃないの」という歌を私たち世代特に愛媛県出身の者は思い起こす。「横顔の美しき子や琴始」は横顔の美しい子だと言っているが正面から見てもまああの顔であろう。特に横顔に美しさを認めたのは章子の美意識なのであろう。「双六」の句。子供の頃の正月の思い出。

歴として夫と行く道初山河

れきとしてつまとゆくみちはつさんが
 正月の日ごる見慣れた景色も、正月を迎えた心で眺めれば、瑞祥に満ちて特に美しく見え（来し方）がはつきりとしてきた。つまり今後の行く末もはつきりと見えてきた。振り返っても悔いのない生き方をして来た確信に満ちて正月を迎えているという。気持のすがすがしい仲まいがうかがえる。このように確信が生まれるのも夫婦互いに長寿であることも肯えよう。こういう丸夫婦見ていると傍目にもすがすがしい。「草氷柱」という題材も魅力があるから、その句ももう少し見てみたい。

「餅花」の句。以外と一般の人はもちばなを知らないが、俳句をする人はよく知っている正月の飾り。餅を指でちぎって小さくするとき付いた餅の指あと。

寒風 ◎ 善野 行

抱けばすぐ泣き出す嬰兒^やの御慶かな
うからみな手に手に土産年初
父のあと継ぎ節餐の主たる
参道に人垣なすや猿廻し
日脚伸ぶ一書に鳥の影通り
雨雲の途切れたる西日脚伸ぶ
夕映えに著き山壁日脚伸ぶ
蓮池の底寒風に吹き晒し
蠟燭に揺らぐ一文字震災忌^{二・一七}
羽根広げ落つる間に翔け寒鴉

別府抄

初 鴉 ◎ 廣畑 育子

初凧の鳶の空なる播磨灘
木遣歌出初式なる青き空
半鐘の響く河原や出初式
出初式えつさおつさと梯子隊
境内の寒の紅梅開き初む
子授けの地蔵に大き鏡餅
赤きもの何かくはへり初鴉
山壁に年初の光差しをりぬ
寒月や地震のあの日の赤い月
庭明かり三楹の花うつむけり

蠟燭に揺らぐ一文字震災忌

ろうそくにゆらぐひとつもじしんさいき
前書きに一・一七とあるから阪神淡路大震災のこ
とだろう。神戸も大きな被害にあつて沢山の犠牲者
を出した。「阪神忌」としてはどうかと狩行先生な
どは新聞で提案されたが、坪内稔典たちは猛反対し
て六花に書いたが、その文を掲載した事で責任をと
り六甲は「狩」を黙つて去つた。その後狩行先生から、
(狩に) 投句は?とはかきをいただいたが、戻らず
そのままになつた。後、「狩」何周年号かで狩座賞
の六甲作品を再掲されて驚いたが、御礼状を出して
そのままになつた。先生からは記念品(時計)とお
便りをいただいた。その後「狩」を片山さんが継承
して「香雨」として出発。遠藤君狭男さんが亡くなり、
六甲は「狩」を去つて、片山さんの天下に。震災が
もたらした災いは六甲にとつても俳句的には良かつ
たと思つている。行の詠んだ一文字が何であつたか
は知らない。神戸市北区の「あいな里山公園」で地
元のボランティアから約100人が竹灯籠を作つた。

出初式えつさおつさと梯子隊

でぞめしきえつさおつさとはしごたい
ご当地加古川市でも河川敷で、一月八日出初式が
行われる。その光景を生き生きと俳句に詠みこんだ、
掲句は梯子乗りの曲芸が消防隊風たちで行われ、見
ているほうがはらはりする。その曲芸の場へと隊員
たちは掛け声とともに曲芸の場へと梯子を運ぶ。そ
の光景のかけ声を文字にして生き生きと描いたので
ある。掛け声にもいろいろあるが育子が表現した掛
け声はどこかのびやかで地方色が出て楽しい。言葉
の斡旋に作者の心まで現れている。夢風撰。

初夢 ◎ 出口 誠

乗り初めの阪急電車梅田まで
 初夢の祖母と父とに会ひに行く
 全天を水色にして冬麗
 冬麗水色の中の黄色かな
 私にはもう過去のこと成人日
 冬の昼息子に怒られませんよに
 深々と仏に祈る冬の昼
 正直に言へばいいんだ冬の昼
 冬の夜息子にほめられますやうに
 一人では生きていけない冬の夜

虚子の忌 ◎ 谷口一献

酒饅頭湯気に淑気の充ちてをり
 初旅や右手のカップ酒熱し
 後ろから覗くのは誰初鏡
 異次元の対策練りて姫始め
 参道に小店戻るや初戎
 虚子の忌や育ての親は別の鳥
 露西亜まで浅き夢見し鳥帰る
 猫交る夢の中まで交るかな
 春浅し無人販売緊張す
 春めきて河に流るる海の水

初夢の祖母と父とに会ひに行く

はつゆめのそぼとちちとにあいにゆく
 初夢の句。俗説の縁起が佳いとされる初富士二鷹、三なすびは別としてせめて初夢に祖母と父親に会いたいと願うのは特に可愛がってもらったのである。彼からよく聴いていたのは父上のこと。人一倍可愛がってもらったのだろう。その大好きな父上は校長先生であったと聴く。その父上の句も詠んではいかただろう。肉親の句は甘くなるが、何句も詠めば、客観的で秀句も生まれよう。様々なことを思い起こし季節感を込めて詠めばいい。

今は御息に叱られないように務めているように見受けられるが、子供への愛情にあふれた句で情感が溢れている。

後ろから覗くのは誰初鏡

うしろからのぞくのはたれはつかがみ
 幸せな家族の初春光景。初化粧をする人を覗き込んでいるか逃げる家族同士の仕草に正月の幸福な家族の光景が覗く。この人の作品は難解なところが一つもない。それは名句を生む条件。漱石のような美文調もよいが俳句は平易な言葉で平易な表現で詠むのが読者を刺激する。参道に小店が戻ってきた。コナ禍から解放される予感の句。虚子の忌の句は、夢風撰。

風の子 ◎ 草場つくし

水漬で走る風の子保育園
浮寝鳥眺むる吾もゆらゆらり
城あとに父は寝ころび冬日和
靴先の色変はりゆく寒の雨
わるがきの般若心経水つ漬
黒手帳極寒逝きし父を知る
かじけ猫帰らぬ主の服の上
ほろ酔ひの終ひ湯となる初湯かな
赤鬼に豆握りしめ泣く子かな
うぐひすや吾が句と同じホーホッキョ

水漬で走る風の子保育園
みずばなではしるかげのこほいくえん
幼稚園の先生をしていた作者の目。風の子は寒さに負けない子供で、水漬をたらして遊んでいる子を元気だなあと感心している。今は水漬を垂らしたら親も保育園も休まず。風邪ではないが、元気なので、昔は風の子と言った。百科辞典によると「子どもは風の子」ということわざは、もともとは「わらべは風の子」であると江戸時代のことわざ本『諺苑（げんえん）』（1797年）に、ちゃんと出ていて（後期だけれど）。歌舞伎の用例もあるようで江戸時代初期には「わらべは風の子」だったのが、後期には「子どもは風の子」になったと言われているという。私たちが子供の頃には宮沢賢治の「風の又三郎」という映画もあった。風は自ら姿を表さないから不思議な神様と信じていた。

垂水抄

初日の出 ◎ 永田万年青

初日乃出人の隙間に杖入れし
年賀状末尾の手書きしかと読む
喜々としてリハビリに行く四日かな
寒鴉あちらで鳴けば応じをり
隠沼を影走りけり冬の鳶
寒晴の天守はなれぬ鳶一羽
快晴の底冷えしたる広場かな
白煙のあと炎の立てるどんと焼
寒波来る気付けば背なの丸まりて
手作業のことのもどかし寒の入り

初日乃出人の隙間に杖入れし
はつひのでひとのすきまにつえいれし
万年青は毎年初日の出を拝みに行く。その場所は人気のあるところで、日の出近くに行くと、拝める場所には人で溢れ、入る隙間もないほど。だから、智慧を働かせて割り込む方法を編み出した。つまり掲句のようにまず杖を入り込ませてじわじわとそこに身体を片つていくのである。智慧なのかちゃっかり者なのかは別にして、展望の利く場所を獲得した喜びと勝ったという喜びが「こいつあ春から縁起がよいわい」というめでたい正月を迎えられた。日の出のは乃という字を幹旋したが、毎年同じ光景を詠むに少し飽いたのか、文字で変化をつけようとした気持も分からないわけではないが、そこまでこだわる必要はない。どんとの句は写生句でなかなか佳いがもう一步踏み込んだ写生句も見せて欲しい。

ちよつと着て ◎ 田尻りさ

巫女の振る鈴に物の芽出でにけり
 ちよつと着て母のセーター捨てにけり
 橋透けて春の夕日の列車かな
 思ひ出はもうよい寒夜になりてをり
 大寒や母の夢見て熱くなる
 立春光桜裸木かけ上る
 この人生神より賜る雪達磨
 タイヤチェーン履かす石働峠下
 寒林の透けて吾子の家垣間見し
 延暦寺の礎石つくばひ春の水

相生抄

初日の出 ◎ 永田万年青

初日乃出人の隙間に杖入れし
 年賀状末尾の手書きしかと読む
 喜々としてリハビリに行く四日かな
 寒鴉あちらで鳴けば応じをり
 隠沼を影走りけり冬の鳶
 寒晴の天守はなれぬ鳶一羽
 快晴の底冷えしたる広場かな
 白煙のあと炎の立てるどんと焼
 寒波来る気付けば背なの丸まりて
 手作業のことのもどかし寒の入り

ちよつと着て母のセーター捨てにけり

ちよつと着てははのセーターすてにけり
 母に対する思い出を持つ人は多いが、彼女の句の
 ような今にいたる反抗期の母思いを詠む人は少な
 い。見るからに良い毛糸で編んだものであると思
 う。せつかくの形見のセーターも今の自身に合うか
 合わないかの判断が強く働き、毛糸をほどこいて編み
 なおそうと思つほどではなかったかもしれない。そ
 れも年齢の所為であろうか。おそらく体形が大きく
 違つのか、母の若いころ当時流行つた派手な色柄だ
 ろうと想像できる。一寸袖を通してみたというのが
 この句の眼目。「思ひ出はもうよい」という捨て鉢
 さも詩の魅力があるが、母上の夢を見て熱くなる
 という感情とは裏腹なのであるか。

初日乃出人の隙間に杖入れし

はつひのでひとのすきまにつえいれし
 万年青は毎年初日の出を拝みに行く。その場所は
 人気のあるところで、日の出近くに行くと、拝める
 場所には人で溢れ、入る隙間もないほど。だから、
 智慧を働かせて割り込む方法を編みだした。つまり
 掲句のようにまず杖を入り込ませてじわじわとそこ
 に身体を片つていくのである。智慧なのかちゃっか
 り者なのかは別にして、展望の利く場所を獲得した
 喜びと勝ったという喜びが「こいつあ春から縁起が
 よいわい」というめでたい正月を迎えられた。日の
 出のは乃という字を幹旋したが、毎年同じ光景を
 詠むに少し飽いたのか、文字で変化をつけようとし
 た気持も分からないわけではないが、そこまでこだ
 わる必要はない。どんとの句は写生句でなかなか佳
 いがもう一步踏み込んだ写生句も見せて欲しい。

ちよつと着て ◎ 田尻りさ

巫女の振る鈴に物の芽出でにけり

ちよつと着て母のセーター捨てにけり

橋透けて春の夕日の列車かな

思ひ出はもうよい寒夜になりてをり

大寒や母の夢見て熱くなる

立春光桜裸木かけ上る

この人生神より賜る雪達磨

タイヤチェーン履かす石働峠下

寒林の透けて吾子の家垣間見し

延暦寺の礎石つくばひ春の水

ちよつと着て母のセーター捨てにけり

ちよつと着てははのセーターすてにけり
母に対する思い出を持つ人は多いが、彼女の句の
ような今にいたる反抗期の母思いを詠む人は少な
い。見るからに良い毛糸で編んだものであると思
う。せつかくの形見のセーターも今の自身に合うか
合わないかの判断が強く働き、毛糸をほどこいて編み
なおそうと思うほどではなかったかもしれない。そ
れも年齢の所為であろうか。おそらく体形が大きく
違ふのか、母の若いころ当時流行った派手な色柄だ
ろうと想像できる。一寸袖を通してみたというのが
この句の眼目。「思ひ出はもうよい」という捨て鉢
さも詩の魅力があるが、母上の夢を見て熱くなる
という感情とは裏腹なのであるか。